

親友関係の光と影

須 藤 春 佳

The Light and Shadow of Close Friendship

SUDO Haruka

Abstract

In this thesis, we discuss two aspects of close friendship. First, the positive aspects—in other words, the light of friendship. Second, we focus on the problems and difficulties of friendship—that is, the shadow of friendship—and discuss the reason why such problems occur. It seems that problems with friendship are more complicated for girls than for boys, so we discuss friendships among girls in a later part of the thesis. At the same time, we examine gender differences in friendship.

Sullivan (1953) pointed out the positive aspects of close friendships. According to him, around the time of pre-adolescence, close friendships develop between two children of the same sex and age; Sullivan called this “chum-ship.” He explained that such close friendships heal any distortion within the child’s former development and promote the child’s psychological development. Many researchers suggest that an individual’s experience of chum-ship is associated with subsequent positive aspects of psychological adjustment. There are a number of reasons why close friendships become important at this time. First, they play a role of psychological protection during a time of transition. Second, a close friend can act as a model or mirror for the child—someone the child can identify with. Finally, a close friend can act as a mediator between the child’s internal and external worlds.

To discuss the shadow aspects of close friendship, we focused on a number of phenomena, namely bullying, school refusal, and the occurrence of traumatic encounters between two girls. We discuss how bullying occurs according to peer pressure, which demands sameness within peer groups. Next, we introduce cases in which girls have refused to go to school because of trouble among friends, and we examine the background problems in these cases. Finally, we discuss traumatic encounters between two girls who were previously friends, in reference to the mirror stage theory (Lacan, 1949). In such cases, the function of mirroring in the friendship is considered to have worked negatively.

キーワード：チャムシップ（親友関係）、親友関係の適応的側面、友人間のトラブル、友人関係における性差、鏡映関係

Key words: chum-ship, supportive aspects of friendship, trouble among close friends, gender differences in friendship, mirroring relationship

はじめに

親友とは何か。これは、古来より人間を取り巻く大きなテーマである。家族関係、恋愛関係、友人関係、学校や職場での人間関係など、人間の人生において重要な意味をもつ人間関係は多様であり、私的な色合いの濃いものから公的なものに至るまで、我々は様々な関係の網の中を生きている。何よりもまず、私たちが生まれてすぐに深いかわりを持つことになるのは家族関係であるが、やがて子どもが家族を離れて一人前の人間になる上で、友人関係、親友関係は大きな役割を果たす。筆者はこれまで、親友関係についての研究、とりわけ前青年期の親友関係「チャムシップ」に焦点を当て、その発達促進的、支持的な側面を明らかにすることを目的とした研究を行ってきた（須藤，2010ほか）。チャムシップを切り口に、前青年期から青年期にかけての友人関係を研究していくなか、親友・友人関係と一口にいても男女の両方を対象に行った調査においては性差が顕著であり、これらを別々に検討する必要があるのではないかと強く感じるようになった。一方、学校現場では友人関係をめぐる様々な問題も起こっているが、特に男性に比べて女性の方が友人間でのトラブルが起こりやすく、友人関係における問題が複雑でないかと考えられる。本論文では、これまで指摘され、また明らかになってきた親友関係のポジティブな面、すなわち「光」の側面について述べるとともに、親友・友人関係の難しさ、いわば親友・友人関係の「影」の側面に焦点を当て、なぜこのような問題が起こるのかについて、いくつかの観点を交えながら検討する。

1. 親友関係の光の側面

親友とは、一般的に「信頼できる親しい友。仲のよい友人。」（広辞苑）、「互いに心を許し合っている友。特に親しい友」（大辞泉）、「互いに信頼し合っている友達。きわめて仲のよい友達」（大辞林）を指す。これらの定義によると、親友とは友人のなかでも特に親しくつきあっている友人を指し、なおかつ、内面的にも信頼し、心を許し合っているような存在であることがうかがわれる。親友がいることによって、人間は相互に他者と理解し合う喜びを知り、孤独をまぬがれることを享受してきたといえる。ここでは、特に親友関係のもつポジティブな側面についてみていくこととする。

（1）前青年期の親友関係「チャムシップ」とは

アメリカの精神科医で、対人関係学派の Sullivan, H. S. (1953ab) は、児童期から思春期への過渡期にあたる前青年期（9歳頃）に生じる、特定の同性同年輩との親密な一对一の友人関係を「チャムシップ」（親友関係）と名付け、この時期には友人関係において顕著な変化がみられるといった。すなわち、それまでの自己中心的な関係の持ち方から、「相手のことが自分と同等に大切に思えるような」友人関係の出現である。この時期には他者とともに調和的に生き、愛他的で全人的ともいえる関係を結ぶことを求めるという意味で、友人関係に著しい変化

がみられるとした。そして、この時期の親友関係がそれ以前の発達の変みを修復すると同時に、以降の心理発達を促進するという点で、人間の心理発達にとって大きな意味を持つものとして重視した。彼によると、愛の形態は初めは同類愛の形をとり、異性愛の基盤を作る重要な関係としてチャムシップを捉えた。

(2) チャムシップに関する実証的研究から

では、チャムシップは実際、Sullivan のいうように発達促進的な役割を果たすのだろうか。これまでチャムシップに関する実証的研究は少なからずなされている。たとえば、チャムシップの経験と愛他性 (Manarino, 1976, 1979)、自己概念 (Mannarino, 1978)、親の離婚を経験した後の心理的適応 (Lusting et al., 1992)、青年期の精神的健康 (Bachar et al., 1997)、成人期の適応 (Bagwell et al., 1998) などとの関連がみられており、「chum は家庭環境や親子関係による否定的影響からの防壁あるいは緩衝として機能する可能性」が示された。国内の研究では、長尾 (1997) が、前思春期 (小4～6) 女子の chum の有無は、高校生女子において、親子関係の葛藤や自我同一性確立の葛藤の程度と強い関連があることを示している。また、須藤 (2003) では、中学・高校・大学生を対象にした質問紙調査を行っており、チャムシップの体験と、自分をめぐる主観的感觉をそれぞれ「chumship 体験尺度」と「自己感覚尺度」を用いて測定し、両者の関連を調べた。その結果、前青年期にチャムシップの体験 (特定の親しい友人に内面を打ち明ける体験) をした人は、自分に対する安心感や温和な感覚をもつということが明らかになった。

このように、チャムシップを経験することが、その後の心理的適応にとって何らかのポジティブな影響を与える、あるいは心理的適応のポジティブな側面と関連を示していることが数々の研究から示唆されている。

(3) 親友・友人関係の実態

上の結果は、主に質問紙調査で得られた結果に基づいているが、実際に子どもたちの間では、チャムシップのような親友関係が築かれているのだろうか? 筆者による、大学生を対象にした回想によるインタビュー調査 (須藤, 2010) では、男女ともに、親友の存在が居た様子が語られた。早い人では、幼稚園の頃から親友と呼べる存在がいて、自分を周囲のいじめから守ってくれた友だちの存在が語られたり (20代男性)、二人で散歩をしながら趣味を共有したり (20代女性)、趣味の本の話をする (20代男性) など、二人の間だけで共有されていた遊びや話題があったことなども語られた。一方、共に目標を決めて競い合い頑張ったり、得意なこと、苦手なことを比べあって切磋琢磨する関係も語られた (20代男女)。このように、小学校以降 (人によっては幼稚園の頃から) 親友関係の体験というものが、青年期になっても記憶のなかに存在し、彼らの体験として定着している様子がうかがわれるといえよう。

また、小学校の現場での観察 (須藤, 2006) からは、休み時間に二人で遊ぶ男の子 (小3) の姿がみられたほか、他愛ないおしゃべりをしたり、現実と空想の世界を共有し、その両者を行き来する女子二人組 (小5) の姿がみられるなど、実際の前青年期頃に、親しい二人組の友

人関係が存在し、そこでは時に退行的でもあり創造的でもある遊びが繰り広げられている様子が示された。

(4) 親友関係の心理発達の意義とは

では、特に前青年期において、親友関係が果たす心理発達上の意義とは何だろうか？須藤(2010)によると、児童期から青年期への移行期にあたる前青年期は、子どもから大人へと実存的な次元での変化を内包した時期であり、発達の転換期である。変化を内包する時期は危機を孕む時期でもあり、様々な心理発達上の問題が生じるとされ、心理療法の対象ともなる重要な発達段階である。この時期を乗り越える上で情緒的守りの機能を果たすものの一つとして、親しい同性友人関係があるのではないだろうか。このような意味で、第一には「移行期における心理的保護の役割」があると考えられる。また、第二に、「同類性を感じられる存在—モデル像としての友人」という役割が考えられる。親友同士はお互いに同類性を感じられる存在であることが重要であり、そこには同一視の心理が働いていて、相手の中に自分の要素を見出そうとするような心理的な働きがみられる。親しい同性の友人は、自らを映し出す「鏡」のような存在として、自らのモデル像として同一視の対象となるのである。この時期の子ども達は、相手が興味をもつものに対して自分も興味をもち、世界を広げていったり、相手を見ることによって、自分を見ることができるようになるといえ、自分を作っていく上で不安な心を支える準拠枠として重要な役割を果たすのではないか。

第三に、前青年期の子どもたちにとって、親友は内的世界と現実世界との両方の領域で会うことのできる存在、いわば内界と外界との間の媒介的存在であるということも大きな意義がある。友人に対して、自分の内面を開示することは、現実世界に生きる他者と内的世界を共有することでもあり、自分一人の内面を現実の存在である友人と共有し確認できるということの意義は大きく、子どもに安心感をもたらすと同時に、子どもが独りよがりではない現実との接点をもつことを可能にするのである。そして、このような内面を開示し合う親友との交流を通して、子どもは内面における「もう一人の自分」、すなわち自分の中に対話することのできる他者の存在を形成することが可能になると考えられる。以上のことから、親友関係はこの時期の自己形成の担い手として重要な役割を果たすのではないかと考えられる。

(5) 友人関係の発達段階と親友関係

ところで、チャムシップは、一般的な友人関係の発達段階の中ではどのように位置づけられるのだろうか。保坂・岡村(1986)によると、友人関係には次のような発達段階があるという。まず、小学校の高学年頃が中心となる「gang-group」があり、これは外面的な同一行動による一体感を特徴とする関係である。次に、中学生頃に活発になる「chum-group」があり、これは内面的な互いの類似性の確認による一体感を特徴とする関係である。最後に高校生頃に活発となるのが「peer-group」であり、内面的にも外面的にも互いに自立した個人としての違いを認め合う共存状態を指す。

須藤(2010ほか)では、チャムシップの出現する時期である「前青年期」は、小学校中学年

～中学校にかけて、と幅広く定義している。前青年期をいつからいつまでと定義するかについては諸説あり、決まった年齢の範囲があるわけではないため、便宜上、上のように広い幅が設定された。これは、心の発達ラインにはそもそも個人差があり、チャムシップのような親友関係を築く年齢には個人差が大きいと考えている事情もある。

保坂・岡村（1986）の説によると、チャムシップのような友人関係が築かれるのは中学生頃に当てはまると考えられる。同類愛的で、相手の中に自分と同じものをみて同一視する関係であるチャムシップの側面が、「内面的な互いの類似性の確認による一体感を特徴とする関係」と表現されているといえよう。ただ、保坂・岡村（1986）の「chum-group」は、Sullivan のいう「相手の事が自分と同じように大切に思える」という愛他性の始まりを示唆するニュアンスよりも、相手との同一視が強く、「一体感」が重視された関係であるという点で、Sullivan のいうチャムシップそのものとはやや性質を異にすると考えられる。中学生頃の友人関係においては、友人と自身の内面への関心が向くと考えられ、しかも互いが似ていること、一緒であることに重きがおかれるという特徴があるといえるだろう。

2. 親友・友人関係にみられる性差

前項では、親友・友人関係の肯定的な側面、発達支持的な側面についてみてきた。ここでは、チャムシップのような友人関係が得られない場合も含めて、前青年期から青年期にかけての友人関係を捉えようとした調査を紹介し、前項で取り上げた調査と併せて、そこでみられた性差の特徴とその理由について検討する。

（1）チャムシップを体験した場合、チャムシップが体験できなかった場合の測定

須藤（2003）で定義した、親しい友人との間での「チャムシップ体験」とは、「相手のことを大切に思い、同類だという感じを起こしてそこから安心感を得、共感的交流により自己理解を促進する。また相手を理想化し一体感を求め、同一視する」であった。ここでは、主に親友関係のポジティブな側面を取り出している（表1参照）。そして、チャムシップの体験を「協同的自己開示」（相手の立場になって考え、色々なことを話す）、「理想化」（相手に憧れ、好感を抱く）、「独占性」（相手を独占したい）の3因子からなる「Chumship 体験尺度」で測った。一方、親しい友人の間では、上のようなポジティブな友人関係ばかりが経験されるわけではなく、チャムシップを経験したいと考えていてもそれがかなえられない場合もある。このような場合を想定し、チャムシップのような友人関係とは異なる友人関係の側面、特にチャムシップを求めているが得られない場合の気持ちや、チャムシップのネガティブな側面（排他性、依存性）を含めて友人関係を捉えることにしたのが須藤（2005）である。ここでは、須藤（2003）で作成した尺度に示されるようなチャムシップの体験を表す、「chumship 因子」や「mirror 因子」に加えて、相手に対してネガティブな感情を抱く体験（「negative 因子」）や、相手との違いを感じる体験（「difference 因子」）も入れた4因子からなる「同性関係イメージ尺度」を作成した（表2参照）。

表1 Chumship 体験尺度（須藤，2003）の因子名と項目内容

「協同的自己開示」因子	相手の立場に立って考えることができた、相手とは何でも話せた、他の人には話さないことでもその友達には話した、お互いの気持ちを感じ取ることができた、お互いに助け合うことができた、生活の中のいろいろなことに對し思うことを言い合い確認した、相手とのやりとりのなかで、自分というものがわかってきた、相手との間で連帯感を感じた
「理想化」因子	相手にあこがれの気持ちをもっていた、自分が好ましいと思うものを相手を持っていてうらやましく感じた、自分の中にないものを相手のなかに見つけた、相手に好感を持ち、同じようになりたいと思った、相手のいろいろな部分に影響された
「独占性」因子	自分と同じようであってほしいと思った、できるだけ二人でいたいと思った、なにかにつけて一緒に行動した、相手がいないとひどくさびしくなった、相手とは色々なことに対する感じ方が似ていたと思う、相手に関心を持つことに自分も興味を持った

表2 同性関係イメージ尺度（SD 法による）の因子名と項目内容（須藤，2005）

chumship 因子	くつろいだ、安心した、気持ちが通じ合う、心の支えになる、なんでも話せる、ありのままの
negative 因子	寂しさを感じる、不安な、反感をもつ、孤独な、ねたましい、排他的な、自分のことをわかってくれない、一緒にないと不安、依存した
mirror 因子	目標となるような、あこがれる、うらやましい
difference 因子	それぞれに違った、別々の、異質な

（2）調査結果にみられた性差

これまでの調査研究結果より、親友・友人関係には性差が顕著であることがわかってきた。ここでは筆者の行った調査研究の結果（須藤，2003，2005）を中心に、どのような性差があるのかについて述べる。須藤（2003）では、前項で示したようにチャムシップの体験を「Chumship 体験尺度」で測り、自分をめぐる主観的感覚である自己感覚を、SD 法による「自己感覚尺度」で測定した。また、須藤（2005）では、前項で示した「同性関係イメージ尺度」によって測られる親しい同性同年輩に対する感情を、大学生を対象に回想法によって尋ね、自我同一性尺度によって測られる自我同一性の程度との関連を調べた。

須藤（2003）では、チャムシップの体験と「自己感覚尺度」で測定された自己感覚との関連の現れ方に、また須藤（2005）では、多様な同性関係イメージを捉えた「同性関係イメージ尺度」と「自我同一性尺度」（Dignan, 1965）との関連の現れ方に、男女の間に違いがあったことから、以下のような性差があると考えられた。すなわち、①女子における同性同士の関係のほうが、男子のそれよりも密である。②男子にとってチャムシップの体験は、主体性、自律性をもった自分を実感することと関連するのに対し、女子では自分は他者と分立した存在であるとの感覚とは関連しない。また、③チャムシップの体験が強い場合、男子は、対自的感覚の明確さがあるとともに、相手の側にも身を置くことができるが、女子は他者優先的な傾向のみが高く、対自的感覚の明確さは低い。このように、チャムシップの経験をもつことは、女性にお

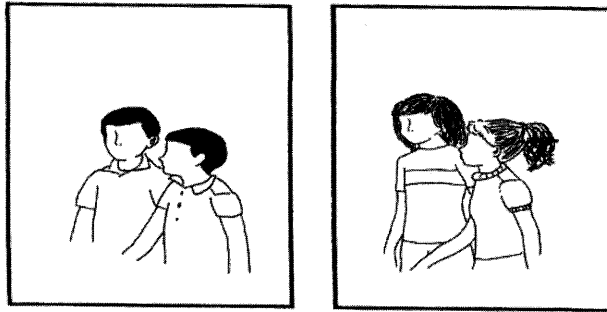


図1 同性友人図版

(指示：この絵の中の人物は、今何を感じ、どうしているのか、この絵の描かれている場面の前にはどんなことがあったのか、この絵の後はどうなっていくのか、という点について、筋をつけて物語を作ってください。)

いては、対自的な感覚の明確さや主体性・自律性を獲得するには至らないという結果が示された。男性は身近な同性との間で自他の違いを感じて連帯しているのに対し、女性は違いを感じる傾向が低く、同性間の距離の近さが窺われた。このことから、女性の方が関係志向的ではないかと考えられた。また、女性においても、男性のチャムシップのような親密な同性友人関係をもつ群はみられたが、それは女性の中では中程度にチャムシップを体験した群であり、身近な同性友人との間で違いを感じており、対自的感覚の安定をもつという、男性に近い傾向を示した。一方、女性において最もチャムシップの体験をした傾向が高かった群は、男性でチャムシップの体験をした傾向が高かった群とは異なり、相手との一体感を伴うような関係であることが示された(須藤, 2005)。他方、男性には、チャムシップを体験しなかった群において、女性にはみられないような、身近な同性との関わりの薄い群がみられた。また男性では、関わり方のスタイルが、極端に距離をとるか、直接的かという傾向がみられた。

以上の結果から、男性では、チャムシップの関係をもつことと、自律性をもった個人として自らを感じることが、相互に関連し合っており、各々が両立しうるものであるのに対し、女性では、チャムシップの関係をもつことは自律性をもった個人として自らを感じることにはつながらず、むしろその友人との関係性の中を生きることと深くつながっており、自らを自律性のある個人として感じるには、親しい同性友人との間で、一定程度、自他の違いを感じることが必要であるということがわかった。個と関係性の結びつきのありようが、男女では大きく異なるといえよう。

また、補足になるが、「同性友人図版」(須藤, 2003)による物語の分析から興味深い結果が得られている。これは、この絵(図版)を見て自由に物語を作ってもらうものであるが、密接な関係から離れる物語が男女ともに作られたが、その物語に対する情緒的反応が男女で異なった。男性では、別れに辛さを感じつつも、今までの友人の存在に対して感謝しひとり立ちしているのに対して、女性では別れへの不安や受け入れ難さが示され、否定的に捉えられていた。このように、同性友人との分離に対するイメージも、男性より女性の方が否定的に感じられることが示唆され、同性同士の関係が「切れる」ことに対して抵抗感があったり否定的なのは、女性に特徴的であると考えられる。

(3) 性差の背景にあるもの

では、どうしてこのような性差が生じるのだろうか？性差を考える手がかりの1つとして、男性と女性では、原初の愛着対象である母親との性別が両者で異なるという点が、大きな相違点として挙げられよう。男性の場合、同性友人との関係は、原初の愛着対象であった母親とは別の、母親とは「異なる性」との関係であるのに対し、女性の場合は、同性友人との関係は原初の愛着対象である母親と「同じ性」との関係になるため、そこに持ち込まれる関係性は、早期の母子関係との連続性を伴う関係になりうるという点が大きく異なるのである。よって、男女それぞれでチャムシップの関係の意味するものが大きく異なると考えられる。上の調査結果にあるように、女性の場合、同性同士の関係が男性よりも距離が近いのは、人生早期における、母親との一体感を伴う母子関係の延長線上に、同性友人関係が位置づけられるからではないだろうか。一方男性の場合は、もともと自分とは異なる「違う」一個人としての同性同年輩の友人とのつながり方が特徴といえるのではないか。また、男性の方は、生まれて初めて出会う同性の愛着対象である父親との関係は、Freud の心理学的発達理論によると、父母と子で形成される三者関係において、異性の愛着対象である母親をめぐるライバル関係に当たる (Freud, 1932)。男性にとって、親しい同性同士の友人関係が最初に体験された父子関係の影響を受けるとするならば、女性に比べて「ライバル関係」という要素が入り込むのかもしれない。

よって、女性の中でも身近な同性友人との間で違いを感じ、中程度にチャムシップを体験した群において、対自的感覚の安定をもつという男性に似た傾向を示したのは、自分とは「違う」存在であるという感覚をもっている群こそ、男性に近い傾向を示したためではないかと考えられる。

以上より、女性においては、同性との友人関係の持ち方が男性のそれより距離が近く、親密な間では一体感を伴うものになる傾向があるといえる。また、女性にとっての同性友人関係は、原初の愛着対象である母親と同じ性別の者との親しい関係に当たるため、その個人がこれまで形成してきた母子関係のありようや諸問題が、友人間にも持ち込まれうるという特徴がある。そのため、女性の方が、同性同士の間で色々な情緒的問題が起こりやすいのではないだろうか。次の項では、このような問題意識から、特に女性の友人間で生じた問題を中心に、親友関係の難しさ、いわば親友関係の影の側面について検討する。

3. 親友関係の影の側面—女性を中心に—

前青年期から思春期の人々にとって、親友・友人がいることは、彼らの学校生活を豊かにする一方、友人関係がうまくいかないために様々な学校生活上の問題が生じているのも事実である。実際、不登校やいじめなどの背景に、友人関係のトラブルや、友人関係の問題があることが多い。田中・吉井 (2005) では、男女ともチャム体験が高いほど「学校接近感情」が高いことを示しており、チャム体験が学校に行きたいと思う要因になっていることがわかった。また、湯野川ら (1984) は、不登校の女子中学生の事例を挙げ、「学校にいけないという現象に、友人関係の問題が関与している症例が少なくない」ことを示している。以下では、友人関係の蹟

きが学校での問題に至った例を取り上げながら、女性を中心として、親友・友人関係の「影の側面」についてみていきたい。

（１）いじめと友人関係

①学校現場におけるいじめ

いじめとは、文科省の定義によると、「自分より弱いものに対して一方的に、身体的・心理的な攻撃を継続的に加え、相手が深刻な苦痛を感じているもの」、「当該児童生徒が、一定の人間関係のある者から、心理的・物理的な攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの」（平成18年以降）である。

いじめは、集団対個の間で起こるものであり、一对一の親友関係とは異なる力動を背景にした現象であるが、この年代の友人関係とかかわりの深い現象であるため取り上げることとした。一般的に、いじめは小学校高学年から中学校にかけ生じることが多い。どうしてこの時期にいじめが生じるのだろうか？その理由としては、様々な視点から分析がなされている。例えば、いじめを「加害者」「被害者」のほかに「観衆」や「傍観者」から成るとする、「いじめの四層構造論」（森田，1986）や、「仲間集団体験の逸脱としてのいじめ」（齊藤，1999）等がある。また、いじめる側がいじめられる対象に対して、自分が嫌う、否定的と感じるものをいじめる対象に投げかける、いわば「影」の投影によっていじめが生じている場合や、いじめる側といじめられる側の相互関係、つまりいじめられる側がいじめる側に対して“理想的で万能的な対象”像を抱いており、逆にいじめる側がいじめられる側に対して“弱い対象、悪い対象”像を抱いている関係性によって引き起こされている場合があるなど、様々な分析が考えられるが、この年代の子ども達にとって、集団対個人という形での攻撃性の発露として、被害者には多大なダメージを与えるいじめが教育現場における問題となっている。

②「ピア・プレッシャー」という視点からみたいじめ

この年代においていじめが多発するのは、前思春期～思春期にかけての発達課題も大きく関わっている。いじめを仲間関係の発達との関連で捉えた視点として、「仲間からの同調圧力（ピア・プレッシャー）」（黒沢，2007）がある。すなわち、中学生から高校生にかけ、友人関係が chum-group から peer-group への移行期にあたり（保坂・岡村，1986）、“同質”から“異質”への仲間関係の発達がみられる。Chum-group を形成している中学生段階の仲間関係においては、同質であることを求めあひすぎるため、少しでも異質な部分が感じられる仲間内の特定の誰かを仲間外れにし続けることで、集団内の同質性は保持され凝集性が高められるのである。このように、同質性を求める仲間からの同調圧力（ピア・プレッシャー）がかかることにより、集団内のある個人が peer-group への移行を望んでいても、過度に同質性を求める chum-group のなかで仲間外れにされるという心理的いじめを受けて不登校になる事例も少なくないという。黒沢（2007）の紹介している中2女子の不登校事例においても、このような友人関係のプレッシャーが引き金となっており、本人が読書や芸術に凝り友人らと話が合わなくなったことから友人関係がこじれだしたという。黒沢によると、この女子は chum-group から peer-group

への移行期における葛藤があり、友人といかにうまくやっていくかということに関心を向けていたところから、自分らしさや自分の個性や生き方を模索していくようになり、このような本人の発達課題をやりぬく過程にいじめや不登校が経験されたと考察されている。

この「ピア・プレッシャー」という現象には、前青年期から思春期にかけて、友人と同じであることを重視するあまり、それが裏目に出て問題を引き起こしている様が現れているといえよう。友人との一体感を伴った関係は、うまくいけば安心感の得られるものとなるが、一歩間違えば、友人と同じでなければ許されないという自らを縛る不自由なものとなる。全く同じ人間でない以上、完全に友人と同じようになることは不可能であるが、自分というものがわからず不安な思春期の子どもたちは、友人と同じであろうとすることで安心を得ていると考えられる。そこでは、些細な不一致や少しでも違う考えをもつということが関係を難しくしてしまうことにもなる。このように、周囲との類似性や同質性が重要となる思春期を生きる女子たちは、学級という集団の中で、友人との間の微妙な関係の綾の中をなんとか生きているとみることもできる。学級集団内の人間関係の中を生きていくためには、「適度に友人に合わせ」、「表だって主張はしないが、密かに自分の考えをもつ」ような、絶妙なバランス感覚が求められるのかもしれない。友人関係のトラブルからいじめを受けたり不登校に至る子どもたちは、このバランス感覚を使いこなすことができず、完全に友人に合わせようとして相手の一挙一動に気を遣って消耗したり、あるいは友達から離れて独自の個性を見出そうとして周囲とそりが合わなくなったりして、集団の人間関係の中では生き辛さを感じている可能性がある。

以上より、いじめという問題を、仲間関係の発達段階と関連付けて考えたとき、そこには「ピア・プレッシャー」という形の、一体感を伴う友人関係の負の側面が垣間見えるのではないだろうか。

(2) 友人関係の問題と不登校

学校現場において、友人関係の問題を機に不登校に至るケースは決して少なくない。最近の事例では、「友だちが別の友だちと遊んだりして嫌になってきた。もう学校に行きたくない。何か悲しくなる。裏切られたみたい」という主訴をもち、うまく友だち関係を築けず不当な仕打ちを特定の女子から受けたことを契機に不登校になった小学校4年生女兒の事例がある（鹿島，2011）。この事例における心理療法の過程では、クライアントとセラピストとの間で両面的な二者関係のテーマが展開し、成育史上の事情からも、女兒が安定した親密な二者関係を築きにくいパーソナリティの持ち主であることがうかがわれた。子どもが安定した親密な二者関係が築けるかどうかは、幼少期の母子関係がいかなるものであったか、子どもの心の基礎となる他者に対する基本的な信頼感を抱くことができるような関わりが親子間でなされたか、という点が重要である。筆者の臨床経験においても、小学生高学年～中学生にかけ、学校生活での不適応から不登校になる子ども達は、そのきっかけとして友人関係がうまくいかないことがある場合が多い（須藤，2010ほか）。彼女たちは、些細な悪口を言われて自分の人格が否定されたと感じて傷ついたりするのだが、その背景には、友人に自分をわかって欲しい、自分の全てを受け入れてほしいと考えているなど、友人関係に完璧さを求める気持ちがある場合もみられ

る。そして彼女たちの生い立ちをたどっていくと、幼少期に何らかの事情があって母親が十分に彼女たちに関われなかったという事情があることが多い。友人関係、親友関係がうまくいかずに不登校等に至る女兒たちの背景には、少なからず幼少期の親子関係において安心できる心の基盤が築かれていない場合が見受けられる。幼少期の母子関係によって築かれるべき心の基盤がもろく、友人関係にも母子関係のように全面的に依存する関係を求めてしまい、「ほどほどの」つきあいができないうえ、些細なきっかけにより人間関係から退却してしまう傾向があるように思われる。

幼少期の母子関係によって十分な安心感が得られていない子どもが、母親の次に親しい同性同士の関係を結ぶのは、前青年期のチャムシップのような親密な友人に対してとなるが、Sullivan のいうように、チャムシップによって十分な関わりの体験が得られたならば、その子どもは安心感をもって人と付き合っていけるようになると考えられる。一方、チャムシップを希求しているにもかかわらずそれが得られない場合、同性友人関係のなかで傷つきを体験する可能性が高くなるのではないだろうか。

このように、同性友人との間で何らかのうまくいかなさをきっかけに不登校等の問題に陥る子どもたちの背景には、同性友人と安定した親密な関係を築く心の基盤が築かれていない場合が多くみられ、幼少期の母子関係がいかにあったかということと繋がっているという意味で、女性の友人関係は人生早期に経験する母子関係の影響を受けうるものであると考えられる。

(3) 事件のなかにみる友人関係

ここでは、いじめや不登校のように、教育現場で恒常的に問題となる事象とはいえないかもしれないが、背景に友人関係の問題があったと考えられる、学校現場で生じた1つの事件を取り上げ、また別の角度から友人関係にひそむ影の側面について検討したい。

①事件の経緯とその背景

浜田（2005）は、近年国内の小学校で生じた悲惨な事件をとりあげ、なぜこのような事件が生じたのかについて論じている。この事件とは、小学校5年生の時は仲が良かった女子二人の間で起こったものであり、小学校6年生の女兒が同級生の女子を呼び出し、二人きりになった所をカッターナイフで切りつけたという殺傷事件である。なぜこのような事態が起こってしまったのだろうか。浜田によると、女兒は、4年生の頃に転校してきたこの同級生女子と仲良くなり同じ部活に入っていたが、勉強を理由に6年生の頃に退部した。そして女兒は5年生の頃に、他者と違う「自分」、内面の自己を強く意識し始めていたと同時に、クラスの中では徐々に孤立を深め、また荒れていた。5年生以降、女兒と同級生女子を含む友人間で複数の交換日記やインターネット上での交流が続いていたが、事件の前、交換ノートやネット上のやりとりでいくつかのトラブルが生じ、これを機に二人の関係はこじれたという。家庭裁判所の審判の決定要旨によると、「加害児童（女兒）は、オリジナリティーやルールへの強いこだわりから、交換ノート等に参加していた同級生に対し、自らの表現を無断で使用することを注意していた」といい、「このことに息苦しさや反発を覚えた被害児童（同級生女子）は、交換ノートに反論を記載し、ホームページに名指しは避けながらも加害児童（女兒）への否定的な感情を直

載に表現したと見られる文章を掲載した。」また、女兒がこの同級生女子が管理するホームページ上の掲示板に自分の悪口（「ぶりっこ」）が書かれているのを見つけ、それを削除し、その後この同級生が女兒への否定的感情を書き込んだとのことである。浜田によると、女兒は自分の悪口を書かれていたことへの被害意識が強く、「女兒は、交換ノートやネットで居場所を維持しようとして失敗し、たった一人の孤立した“私”に押し返されてしまう場面で爆発した」という。また、この頃女兒は、中学3年生のクラスメイトが無人島に拉致され、互いに殺し合う映画「バトルロワイヤル」の影響を受けていたと考えられており、犯行はリアリティがなくイメージの世界からそのまま抜け出したかのように奇妙に計画的で、同級生女子を切り付けた後も女兒は呆然と立ち尽くしていた。「現実には悲惨な結末をもたらしたものでありながら、リアリティに欠ける」（浜田、2005）のがこの事件の特徴であるという。

上の事件については、筆者は直接関わっていないので、浜田(2005)や朝日新聞西部本社(2005)に基づき間接的な形で考察を進めることとなる。また、この事件は女兒と同級生女子の相互関係によって生じたものであるため、一方の立場から述べるのではなく、両者の生育史や性格も含めて総合的に検討すべきである。しかしながら、ここではそれらの情報も十分ではないため、親しかったはずの友人間で、なぜこのようなことが起こってしまったのかを考えるために、知り得る範囲内での情報を手掛かりにすることとなるが、以下では筆者による考察を述べる。

まず、女兒にとって、一緒に部活に入っていて親しかった友人から、ある日突然、ネットというバーチャルな世界で他の人にも開かれたところで悪口を書かれるという出来事は、自分が友人から疎外されたという経験をする事となり、その衝撃の大きさが女兒を思いつめさせ、悲劇的な事件へと至らせたという可能性が考えられる。特に、女兒が同級生たちに自分の表現を無断で真似られることへの抵抗感について、友人（同級生女子）から反論されるという形で、共感が得られなかったことの衝撃と怒りは大きかったのではないかと。女兒にとって、友人からの否定的な反応が、自身のことを尊重されない体験となったと考えられる。そして、攻撃の矛先が同級生女子に向かったのは、自分が親しいと思っていた人に裏切られたという思い、味方と思っていた人から疎外されることの痛手の大きさを物語っているのではないかと考えられる。クラスの中での女兒の孤立もあいまって、周囲は皆が敵のような状態に感じられていたのではないかと考えられ、それに輪をかけて親しい友人と思っていた人からの裏切りが自分をとりまく世界すべてへの不信感をもつような状態へと至らせてしまったのではないだろうか。また、このような疎外の体験がネット上で起こってしまったということの問題も大きく、女兒と同級生女子とのいさかきもネット空間というバーチャルな世界の中での出来事であり、彼女が犯行を計画したもになっているのは映画という非現実の世界のものである。直接顔を合わせないバーチャルな世界での疎外体験が膨らんで現実世界への不信感へとつながってしまい、このような悲劇へと至ったのではないだろうか。女兒にとっては同級生女子の生身の感情や実体がつかめないまま、彼女に疎外されたという女兒の被害感情や怒りが同級生女子へと向けられた可能性があり、同級生女子との間でこのままでは自分が攻撃されてしまうから、自ら攻撃しないと、という抜き差しならない関係に至ったように感じられたのかもしれない。

②友人関係における「鏡」の機能の負の側面

では、なぜ親しかった友人間でここまでの壮絶な反転現象が起こってしまうのだろうか。ここで、友人関係に内在する「鏡」としての友人の性質を取り出し考えることとする。本論文の1(4)では、同性友人関係の心理発達の意義について「同類性を感じられる存在—モデル像としての友人」という視点を挙げ、「親友同士はお互いに同類性を感じられる存在であることが重要であり、そこには同一視の心理が働いていて、相手の中に自分の要素を見出そうとするような心理的な働きがみられる。親しい同性の友人は、自らを映しだす『鏡』のような存在として、自らのモデル像として同一視の対象となる」と考察した。ここでは「鏡」としての機能の肯定的な側面を示したが、その否定的な側面、負の側面がこのような事件においては顕在化していると考えられる。

身近な同性友人関係は、そこに自らを映し見、確認することのできる鏡のような関係、いわば「鏡映関係」にあるといえる。ここで、鏡像との同一化が人間の自我形成において重要な役割を果たすと指摘した精神分析家 Lacan, J (1949) の鏡像段階論を紹介し、親しい友人間での同一視が悲劇的な結末を招く機序について考えたい。Lacan は、乳幼児期の人間の子どもが鏡に映った自分の姿に著しく興味をもつ事象を発見し、鏡に映った自身の全体像を視覚的に捉えることにより、人間は自我を作っていくと論じた。すなわち外在する身体の全体的形態によって人間の自我主体が規定されていくとの視点を打ち出し、彼は自我の起源がここにあり、人間は根源的には「自己疎外する同一性という鎧を身につける」とさえ述べている。一方、思春期における親しい友人同士の間での同一化は、Lacan の観察した乳幼児期の事象とは同一ではないが、同類性を感じられる自分の外にあるもの、他者との間での同一視によって生じる問題の背景を考えるにあたっては、鏡像段階論に示されている両義性が参考になると考えられる。つまり、Lacan は鏡像段階論において、自分を映し見ることのできる鏡像との同一化は、鏡像の備える「外在性」ゆえ、「わたしの精神的恒常性を象徴すると同時にそれがのちに自己疎外する」という。すなわち、人間は同類性を感じる他者に自らを映し見ることで自らを成り立たせることが可能になると同時に、それが外在する他者性を持った存在であるゆえ疎外されるという側面をもつという両義性が指摘されている。

前述したような、一方が他方を同一視の対象としている「鏡映関係」は、いわば一方が他方に自分の主体性を預けている状態で、他方からの承認や肯定的な反応を得ることで安心が得られるような関係でもある。親友関係とは、友人との間で内面の共有、確認がなされることで心の安定化の機能が生じると同時に、一方が他方の肯定的評価を得られなければ自らの主体性が拘われ、崩れてしまうような、一歩間違えば危うい依存関係にもなりえる。このような関係においては、相手に自分の主体を託しているから、自分への否定的評価や攻撃によって主体の安定は窮地に追いやられ、崩れそうに追い込まれてしまう。そこで、自分の主体が崩れないようにするため、同じような形で相手への攻撃へと反転が生じるのである。これは、相手と自分が分かちがたく情緒的に結びついているがために生じる現象で、女兒が同級生女子に対し、親しい同性友人として、鏡のように自分をそこに映し見て安心を得ていたのではないかと1つには考えられるのである。女兒と同級生女子は、5年生時は仲が良かったといい、その後6年生に

なって関係にひびが入ったようである。女兒にとって、かつて親しかった同級生女子からの悪口を書かれるという体験は、自分のことを受け入れてくれていたはずの友人から、突如としてネット上で中傷されたことにより、自分が否定されたような感覚を覚え、全てが反転したような衝撃が与えられたのではないだろうか。女兒と同級生の間で、直接言葉でのやりとりや、ぶつかりがあればこのようなことにはなっていなかったかもしれない。むしろ、言葉のやり取りがネットというバーチャルな世界で、相手の顔が見えないところで、しかも女兒以外の他者に向けて行われた攻撃であるため、自分の預かり知れないところで女兒の主体が奪われるという強烈な体験となった。掲示板に書かれた悪口について、女兒自身がメッセージを消すという形で一旦は抵抗したが、再度同級生女子に書き返されるという追い打ちを受け、それ以上なすすべもなくなった女兒の主体性は粉々に碎かれ、同級生に対する直接的な攻撃を企てるという悲劇をたどったと考えられないだろうか。ここに、友人関係のなかの「鏡」の機能が否定的に働いた場合、すなわち影の側面をみてとれるのではないかと考えられる。なお、家庭裁判所の審判の決定要旨によると、女兒の両親は「情緒的働きかけが十分でなく」、女兒には「自分の欲求や感情を受け止めてくれる他者がいるという安心感や愛着を形成し難かった」との記述があり、女兒に成育史上の事情からここに書かれたような安心感の希薄さがあったとしたら、上のような傾向を強めた1つの要因になったと考えられることを申し添えておく。

おわりに

以上、前青年期から思春期にかけての親友関係について、その光と影の側面から検討してきた。「友情」は人間の文化社会を成立させているおおもとにあるものであり、多くの文化で「親友」というものは重視されている（須藤，2009）。すなわち、親友関係の特徴とは、上下関係や権力関係を伴わない「対等さ」であり、人間社会の中で対等な交換関係を成立させるものであり、地位の異なる人を結びつけ対等にする働きをもっている。また、個人レベルで捉えるならば、親友は「一対の魂」、「自分を映す鏡」とも考えられ、「もうひとりの自分」として捉えることもできる。人生の色々な出来事を共有し、自らの個人的な悩みを話し、どう生きるべきかについて語り合うような親友との関係は、自身と分かちがたく結びついた存在であるともいえる。このように、親友関係は、人間の生活の営みのなかで、社会的関係であると同時に私的・個人的関係でもあるという性質をもつ。

一方、親友との付き合いは喜びも多いが、悩まされることも多いものではないかと考えられる。本論文で、親友関係の「影の側面」として論じた点は、悩まされ、時に人間を狂気に駆り立ててしまうほどの影響力をもつものでもある。確かに親友関係は、自分の分身であるかのような感覚を覚えやすい対象であり、だからこそ互いに助け合い、思いあえる存在でもある。他方、難しさとしては、「自分のことをすべてわかってくれる」完璧な友人、すなわち一体感を伴う友人関係を求めることにより、それがかなわないことによる絶望や裏切られたという感覚を引き起こすほどの衝撃を与えてしまう側面もある。また、友人との間で「相手に自分のことがすべてわかってもらえる」ことは自分が他者に理解されているという喜びや安心感を得られる一方で、「相手に自分のことをすべてわかられている」ことが怖さを生み出す側面もある。相

手も一人の人間であるということを踏まえ、それぞれに違う人間ではあるが理解し合い、対等に渡り合っていけるような友人関係が理想的ではないだろうか。

前青年期に経験される一対一の親友関係は、友人関係の理想形であると考えられるとともに、実際に児童期から青年期の人々がこのような関係を経験していることは事実である。しかし、このような関係が人生を通してずっと続くかという難しい面もあろう。前青年期という時期だからこそ、希求され、意味をもつという一面もある。各人生の段階ごとに、喜びや苦しみを分かち合う存在は移り変わるかもしれないが、「一対の魂」としての同性友人のイメージは、普遍性のあるものではないかと考えられる。また、このように親友を持ちたいという希望が、人々に対して友人に期待するものと現実を経験されることとの間でギャップを生んでいるのかもしれない。親しい友人とどのように付き合っていくか、これは自分とどのように向き合っていくかという課題にもつながっていると考えられ、人間にとって終わらないテーマなのではないだろうか。

本論文では、いくつかの事例を取り上げ親友・友人関係の「影」の側面を検討したが、今後はこれらをより深めることや、男性の友人関係についても検討することが課題である。

文献

朝日新聞西部本社編著（2005）11歳の衝動．雲母書房．

Bagwell C. L., Newcomb A.F., & Bukowski W. M. (1998) Preadolescent friendship and peer rejection as predictors of adult adjustment. *Child Development*, 69(1), pp. 140-153.

Freud, S (1932) *Female Sexuality. Collected Papers, Vol. 5*. London: The Hogarth Press. 懸田克躬・吉村博次 訳（1969）『女性の性愛について』フロイト著作集5．人文書院，pp. 139-156.

浜田寿美男（2005）子どものリアリティ 学校のバーチャリティ．岩波書店．

保坂亨・岡村達也（1986）キャンパス・エンカウンター・グループの発達の・治療的意義の検討—ある事例を通して．*心理臨床学研究*，4(1)，pp. 15-26.

鹿島なつめ（2011）対人関係の「裏切られた感じ」から不登校となった前思春期女兒との面接過程．*心理臨床学研究*，29(2)，pp. 177-187.

黒沢幸子（2007）いじめと不登校．*臨床心理学*40（7巻4号）特集 いじめと学校臨床．金剛出版，pp. 460-466.

Lacan, J. (1949) Le stade du miroir comme formateur de la fonction du Je. 宮本忠雄他共訳（1972）くわたし」の機能を形成するものとしての鏡像段階．*エクリ I 所収* 弘文堂，pp. 123-134.

Lustig, J. L., Wolchik, S. A., & Braver, S. L. (1992) Social support in chumships and adjustment in children of divorce. *American Journal of Community Psychology*, 20(3), pp. 393-399.

Mannarino, A. P. (1976) Friendship patterns and altruistic behavior in preadolescent males. *Developmental Psychology*, 12(6), pp. 555-556.

Mannarino, A. P. (1978) Friendship patterns and self-concept development in preadolescent males. *Journal of Genetic Psychology*, 133(1), pp. 105-110.

Mannarino, A. P. (1979) The relationship between friendship and altruism in preadolescent girls. *Psychiatry: Journal for the study of Interpersonal Processes*, 42(3), pp. 280-284.

文部科学省 HP「いじめ」の定義について (http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/06102402/001.htm) 2011/9/13

森田洋司・清水賢二（1984）新訂版いじめ．金子書房．

齋藤万比古（1999）思春期の子どもの仲間集団体験について—登校拒否と“いじめ”をめぐる—．河合

- 洋編 (1999) いじめ 〈子どもの不幸〉という時代. 批評社, pp.45-67.
- 須藤春佳 (2003) 前青年期の chumship 体験—自己感覚との関係から. 心理臨床学研究, 20(6), pp.546-556.
- 須藤春佳 (2005) 思春期・青年期における身近な同性同年輩関係—関係イメージと同一性との関連より—. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 51, pp.232-246.
- 須藤春佳・伊藤良子 (2005) 大学のディスクールと精神分析. 臨床心理学, 5(5), pp.636-642.
- 須藤春佳 (2009) 親友関係についての一考察—文化・社会・心理学的視点から—. 京都文教大学臨床心理学部紀要1号, pp.99-108.
- 須藤春佳 (2010) 前青年期の親友関係「チャムシップ」に関する心理臨床学的研究. 風間書房.
- Sullivan, H. S. (1953a) Conceptions of modern psychiatry. 中井久夫・山口隆共訳 (1976) 現代精神医学の概念. みすず書房.
- Sullivan, H. S. (1953b) The Interpersonal Theory of Psychiatry. 中井久夫他訳 (1990) 精神医学は対人関係論である. みすず書房.
- 田中良仁・吉井建治 (2005) チャム体験と家族凝集性が学校接近感情に及ぼす影響. 心理臨床学研究, 23(1), pp.98-107.
- 湯野川淑子・平田美音・牧佐知子・清水将之 (1984) 青年期女子における不登校と交友関係についての一試論. 児童青年精神医学とその近接領域, 25(5), pp.296-302.

(原稿受理 2011年9月20日)